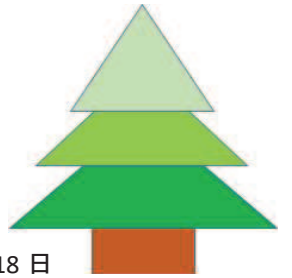




嵯峨宮頼り

4号



嵯峨宮：群馬県みどり市大間々町小平 348 番地

発行日：2019年3月18日

発行：嵯峨宮世話人会

新元号を迎えるにあたって

「嵯峨宮頼り第4号」が平成最後の便りとなりそうだ。明治以降改元は天皇一世一元号となったが、小平創成の年の嘉暦（一二三二年五月二八日—一二三九年九月二二日）は四年で、疫病と地震のため改元されたとある。一般農民は読み書きすらおぼつかない時代とはいえ、頻繁なる改元は労力を要しただろう。いわんやデジタル全盛の今日、効率を求めるコンピュータが最も面倒とする分野であり、業界では様々な〇〇年問題として対応してきた。

平和裏の改元は神社や寺への影響は少ないが、政争・政変に伴う改元は大きな影響を伴う場合が多い。慶応から明治に変わった時は神仏分離令が出され

各地で廃仏毀釈運動が行われ多くの仏像や寺院が破壊された。神社の中でも仏教色の強い神様を祀っているところに対しては容赦なく影響を及ぼした。さらに明治三九年の神社合祀令で整理事業が行われ、一町村一社を原則に統廃合された。戦後に宗教法人となり復祀された例もあると聞く。小平地区には嵯峨宮の他に八王子神社・木ノ宮神社という類似した規模の社殿がある。近隣の崇敬者により細々と維持されてはいるが状況は厳しい。

お悔やみ

赤石清氏（五十九歳）は平成三十一年一月十三日ご逝去されました。嵯峨宮世話人会役員として昨年七月に就任し秋季大祭等に積極的に参画して頂きました。役員一同心よりご冥福をお祈り申し上げます。

お知らせ

小平創成の道ウォーキングは延期します

前号にて三月中旬実施予定とした大畑・茂木ルート（左図④）のウォーキングは延期することに致しましたので宜しくお願い申し上げます。

二月中旬、ルート安全確認のため下見を役員と地元の方と四人で行いましたが、道らしき道を見つけないことが出来ず、大人数でのウォーキングには準備不足と判断しました。

更に調査を続け安全が十分確保できた段階で改めて募集する予定です。

四、五十年前には茂木から花輪まで剣道の練習に毎日この道を通った人もいた



くらいポピュラーな山道でしたが、今は日常的に山へ行く人はほとんどいません。山道は木の葉で埋もれ、至る処倒木で塞がれ、崩れ、杉林も大きくなって見通しが利かず、林道で分断され、獣道も多く、五十年前の山道の記憶は通用しませんでした。今回は小平茂木側から登り始めましたが、次は大畑側から登るなどしてリベンジしたいと思っています。「山道は地図を過信するべからず」

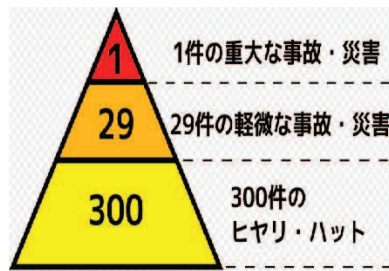
ハイインリツヒの法則

「二度あることは三度ある」物事は繰り返して起こる傾向があるから失敗を重ねないようという戒めの格言である。格言の大半は失敗体験に基づく。人はそれ程に失敗する。

以前あるとき社（やしろ）の扉を開けて唾然とした。祭壇にある二個の蠟燭立てから溶けた蠟が溢れ、階段を滝の如く幾段にも垂れ落ち連なっている。大事に至らなかつたのが不思議なくらいだった。

電灯スイッチを入れたが点灯しない。軒下の蛍光灯も消えている。元をたどって行くと七十メートル離れた電柱の外灯も消えている。近隣住民に聞くと一、二ヶ月前から外灯は点かず、蛍光灯はもつと以前から点いていなかった。大至急電気屋に電話すると前橋から駆け付けて点検

し、「電気が来てないから東電を呼べ。」と。東電に話すとサービスの人が来てやがて高所作業車が来て電柱の上にある機器を交換してやつと外灯が点灯した。しかし軒下の蛍光灯はまだ点かず、玉切れだった蛍光灯を交換して漸く点灯。電気料金の履歴をみると半年間基本料金のままだった。



ハイインリツヒの法則はアメリカの保険会社で人の関わる労働災害を調査し、五千件以上に及ぶ事故事例から統計的に導き出された経験則である。

一つの重大事故の背景には二十九の軽微な事故が

あり、さらにその背景には三百のインシデント（ヒヤリハット）が存在するというものである。三百のインシデントの背景には、さらに数千から数万の不安全行動や不安全状態が存在するから、日常的な行動の管理こそが事故や災害を防止する最良の手段であるというものである。

蠟燭の火の消し忘れが直接要因ではあるが、人はうっかりミスをするものである。それ以前に電灯が点いていれば蠟燭を灯す必要がなく、又蠟燭がそこに無ければ、又ライターと一緒に置いて無ければ、又蛍光灯ランプを交換していれば、又外灯が点灯しないと管理者に通報されていけば、又蠟燭が小さければ、又その時二人以上いれば、又それら不安全行動や不安全状態のたった一つでも注意され実行されていけばこのヒヤリ事故は回避できた。幸いにも

大事故に繋がらなかったのは神様の御加護によるものと思っている。

大事故は、無関心による不注意で、歯止めがことごとく効かなくなつて生じる人災である。大きな御節介は疎まれるが、小さな御節介は神の声と思いたい。

山の向うの小夜戸を知っていますか

東町小夜戸が最近花桃や小正月祭で存在感を示している。小平とは山で接し親戚のある家も多い。渡良瀬川東岸の沖積地にあり、その山が東南にそそり立つて冬は昼まで日が差さず、オシメは干す傍から凍ったとか。寒いから一所懸命体を動かし働く。結果小夜戸の農家は皆蔵が建つたと、日当りの好い渡良瀬川西岸住民が言う聞く。確かに「蔵の郷」といえるほど白壁が目につく。小夜戸の始まりは応仁の乱を逃れた関西人が来て住み着き、領主の新田氏

に年貢を納めたと古文書にある。小夜戸の山は、昔から軒下を離れば裏山は全て御領地、今は国有林で足を踏み入れられない。茅葺屋根の萱すら小平に山林を取得しそこから山を越えて運んだ。足尾銅山が開かれ銅街道ができたが、道は川の西岸で、繋げる橋は自前、大きな負担だった。小夜戸の人は魚を捕りに山へ行く。山を越え小平川で魚を捕る。渡良瀬川に魚はいなかった。

小夜戸の白壁は地形だけにによるものではない、社会の厳しさが磨き上げた白だ。小夜戸から嫁（婿）を貰うと蔵が立つとも聞いた。小夜戸の稲荷神社には嵯峨宮同様花輪の彫刻師による見事な細工の社殿がある。共に地域住民に支えられ地域の発展を願う見守る神社である。小平から小夜戸へ山を越え小豆粥と一緒に食したいと思っている。（阿直）